

○ 課題報告Ⅲ

柳田国男における「都市と農村」

中井信彦（慶應義塾大学）

るようになります。この時点では、都市と農村の対立関係を問題にしてくるところに、それ自体歴史的な事実としてみることができるのではないでしょうか。

〔文献〕
「田舎対都会の問題」 明治三十九年 (『時代と農政』所収、
全集第十六巻)
「町の経済的使命」 明治四十二年 (同右)
「地方文化建設の序説」 大正十四年 (全集第二十九巻)
「都市建設の技術」 昭和二年 (同右)
「都市趣味の風靡」 昭和二年 (同右)
「都市と農村」 昭和四年 (全集第十六巻)
「明治大正史・世相篇」 昭和六年 (全集第二十四巻)

柳田の日本都市に対する理解は、都市はもと農民の従兄弟によつて作られたものであり、それは農村からの移住者たちの一時の仮住の集合であつて、農民と人種を異にする市民がいるわけではなく、という見解の上に立っています。

一方で、柳田は都市を、権力・金融・交通などの人中央集権と の関係で把えており、同時にそれを、外国文化との人接衝点とし て把えています。

このような都市農村の連続性と都市の性格づけは、とつびな類推ですが、マルクスのアジア的共同体とそれに基くアジア史の理解 (『先行する諸型態』など) を想起させます。

そして、柳田の連続觀は、大正末—昭和初年にゆれをみせてい

要するに、人口と文化の移動という共通のものを基底にすえて、都市と農村とを、それぞれの住民の生活体験にもとづく結合の差異と共通性とをさぐりつつ、人資本と労働の配分された、いわば人結節地域の要素として位置づけようとするところに、柳田の一貫した政策的意図があり、それを明治末—昭和初年の現実の歴史過程に即応して、屈折した表現をとったところに、柳田の著作があると思われます。それは、われわれにとって、そこから研究上の示唆をうけうる豊かな泉であると同時に、ひとつのイデオロギーとして、それを研究の対象とするに価するものでもあると考えます。